◆２００９年　１０月

八木健選 「七句」・・・ (鑑賞も五七五)

１．　**かぶと虫負けて兜は脱がざりき**　（永井一朗）

かぶと虫勝つても締める緒はあらず

２．　**やれ打つな蝿も絶滅危惧種なり**　（池田無了）

そう言えばこの頃あまり見かけない

３．　**取巻きの夜な夜なゐたる月下美人**　（田代青波）

勿体をつけてゆつくり登場し

４．　**腹の虫まだ治まらぬ虫の闇**　（ 永島董玉）

虫の声聞いてなだめる腹の虫

５．　**おくりびと生で清めるビヤホール**　（松尾軍治）

そうすると冬は熱燗小料理屋

６．　**首縦に振れぬ商談扇風機**　（村上美和）

扇風機良い話にもうなづかず

７．　**鳥兜と名知りしより肥やし遣る**　（倉方　稔）

いつの日か役に立つかと思ひつつ

青山桂一
夏シャツに着替へて老いははにかめり
ただならぬ臭ひを風に栗の花
梅雨さなか蔓は四方へ逃げ惑ひ

秋月裕子
花トンネル鼠追ひかけ猫走る
摘んで呉れと光を放つ蓬かな
ペン探しめがね探す間つばめ来る

麻生やよひ
朝令を暮改の如く酔芙蓉
喉元を過ぎても熱し原爆忌
雪舟忌ミッキーマウスは五十路とか

足立淑子
少しずつ距離を置きたい秋日傘
幸せを掴む手だろう置く扇
期日前投票済ませ風の盆

有吉堅二
冷麦の赤一本の行きどころ
吾死なば月の兎になるつもり

阿部陽子
自転せる地球コスモス揺れつづけ
昔星落ちし盆地や馬肥ゆる

願ふこと思案してゐる星祭

流星の飛び損ねては隕石に

安藤淑子
届く葉書どれも「暑い」と、そうざんしょ
縄と思い轢けばのたうつ青大将
暑いとて入れ歯も脱げば夫ひよつとこ

井口寿々子
午後の九時月下美人はおもむろに
釣忍風の訪れ待ち居たり
うらやまし光を弾く茄子の肌

井口夏子
夕顔のしぼむ頃ですかえれねば
弾くたび声をこぼして鳳仙花
きめわざはでんぐりかえしかぶとむし

池田無了
蟇三匹汝も句会しおつたか
静けさや蝉鳴き地蔵の仏頂面
やれ打つな蝿も絶滅危惧種なり

伊藤浩睦
地下鉄の窓の日除は使はれず
朝顔に向かつてしても立ち小便
夏柳守る気のなき起請文

稲沢進一
渋柿や人間として六十年
長男も次男も無口茸飯
閉店のにぎはひ登山用品店

井野ひろみ
呼び止めて苦瓜くるる瓜くるる
蝉骸そこここにあり夕散歩
幼な子の浴衣着せられベソをかく

今城夏枝
眠りても胸に花火の花開く
かなかなや夕飯の支度急かされる
寡黙な人となりきつてゐる炎天下

越前春生
甚平着てふりむくことのなくなりし
生身魂朝市に下駄鳴らし来る
回転寿司混みて八月十五日

奥脇弘久
天高し馬も逃げだす食い放題
酒蔵にほろ酔い機嫌?霄花
お下げしてよろしいでしようか赤のまま

笠　政人
手の甲に別れを惜む恋蛍
マイホーム手離すものか蝸牛
子燕の条件反射口開くる

加藤澄子
高校野球のヴォリームを上げ夏こもる
水を飲みまた水を飲む暑さかな
句は楽よ八月十九日は俳句の日

加藤　賢
聞き惚るる己が演説昼寝覚む
高階の蚊に両の掌を打ち鳴らし
猫に水嘗められてをり金魚玉

貫太郎
鰯雲胸部写真を見るやうな
新涼やどつぷりつかる露天風呂
大黒の愛想良きこと盆の寺

北村真佐子
応援席悲鳴貫き夏終わる
不揃いも虫食いも愛しなすびもぐ
かなかなに寂しいかなと問われけり

久我正明
もち肌を鳥肌にするかき氷
スイートコーン歯型を入れて食いにけり
善と悪どちらも属す酔芙蓉

草薙一朗
猿滑りと書いて納得百日紅
蟻過るボルトの如く懸命に
生身魂次第に知らぬ存ぜぬに

工藤泰子
蝉時雨小太鼓のバチ撥ね上げる
ごんご通りに河童の像や日の盛り
夏休みいろはもみじのはにほへと

倉方　稔
鳥兜と名知りしより肥やし遣る
鬼やんま監視カメラの目付きして
止められぬ薬物依存夏の風邪

黒澤正行
禿赤毛坊主頭も三尺寝
いずこ病む診察室え放屁虫
俳人に鳴かされている蚯蚓かな

黒田忠一
蜘蛛糸に手足縛られ朝歩き
尻の位置腕より高く草引く女
西瓜喰ひ身代りとなる俺の腹

小玉石水
校長何かやらねばと
　　校庭の草むしりだす
この世ではあつても困る
　　なくても困しおあしかな
バースディ蝋火を
　　消してしまうのは客の少年

桜井宇久夫
秋夕焼大きぐい呑選びけり
村芝居遠山桜くづれをり
蓮見茶屋尻落着かぬ客一人

佐治洋一
大花火煙の中に身を隠す

佐藤古城
悪口だけ聞こゆる耳の生身魂
水浴びの男の児しげしげ姉の股
月を取ると竿持ち門を出る児かな

佐藤義子
ヨダレ出しモップかけ真似る幼子よ
出番だよすず虫のヒゲ整える
どの人も頬染めて見る遠花火

佐野萬里子
桜桃のソフトクリーム夫と食ぶ
盛り蕎麦に牛たん単品追加して
峯入りへ山伏揃ひ法螺を吹く

佐野ゆきこ
バスを待つ電信柱の影ふとり
身を憂う給料日前の誕生日
ゴキブリは忍者のごと身を隠し

柴田真一
蟷螂も蝗も知らず現代子
我が党は自然党なり蝉時雨
少子化や園のブランコひとりつ子

清水呑舟
むかご飯ぽろりと本音零しけり
開くるたび妻の声飛ぶ冷蔵庫
秋うらら音痴を詫びるバスガイド

首藤虎男
朝顔が露洗いしか美人見得
蝶花と甘味碌でなし伍に落とせ
風鈴の余韻重ねてまどろむや

壽命秀次
付きまとふ吾は用なしやぶ蚊かな
冷麦の鍋に気付けの水をさす
一口の襲ふこめかみかき氷

白井道義
いそいそと嫁と出掛けし生身魂
人並に指で弾きて西瓜買ふ
検診の胸に香水ひと滴

杉村福郎
秋風やおならと歩く前の人
地震るに朝顔一つ微笑して
泉への道駈けゆくもをかしけれ

鈴木和枝
冬瓜がでつかく育つ亡父の畑
コオロギ夜つぴてい鳴く誰を亡くしたの
草の名を草に問いかけて褒めて

鈴木みのり
秋日和金子兜太のよく光る
にしきへびと私メタボ晩夏光
今日出産予定のきりん緑雨かな

高田敏男
泡を食うビアガーデンの俄雨
周旋屋仲介土地に小判草
斑猫を追い越すように行者道

髙田菲路
役者みな痩せゐてロケの馬肥ゆる
香尊帳のみには見ざる紙魚の穴
海女小屋の海女に抱かれて竹夫人

高橋真紀子
森の精のどこかに潜み木下闇
まだ何も食べてないのに暑気中り
八月や指定席車の子ら騒ぐ

高橋　都
手花火やじじの仕事のひとつふえ
散りぎはにリンと鳴らせよ芋の露
茄子の馬足三本で辿りつき

高橋素子
キリギリス鳴かせて走り超特急
じつと待つ極楽とんぼの子は地獄
渋滞のローマの夏を渡りきる

田中章子
狛犬さん怪獣になる十三夜
ポッケトにしまいたくなる流れ星
昼寝覚め丸い口開く仁王像

戸谷笑子
墓参お願ひ多き人のをり
宿題のやり残したる残暑かな
秋立つや聞き耳を立て辻地蔵

中沢荘荷
赤とんぼ青信号で渡りけり
夏痩せもせぬゴーギャンの女かな
朝顔にうつつをぬかし痩せもせず

畷　崇子
時効なし被害者遺族灯り見る
夏山は半袖上衣招かずや
伸びる草刈つた時だけ征服感

彦阪義久
蝉の穴地球の裏側今が冬
ゴキブリは忍者衣装良く似合ふ
竹婦人シャネルの五番だけ纏ふ

日根野聖子
終戦日メタボあまたのこの国の
自己主張なんだか愚痴だか蝉の鳴く
秋暑しやる気の溶けてしまひたる

藤森荘吉
風鈴が留守番となる長き旅
騒騒し世間では世間余は端居
ストローでパックの麦茶飲む作法

二神重則
つまみ食い待つてましたと法師鳴く
月語る余り十五のまだ前期
どんどびの猫のあくびや夏過ぎる

前川敏夫
村芝居つまるセリフを客が云ひ
土壇場でいつも雷鳴安芝居
大木を鳴動させて蝉一匹

田代青波
羅の風を起こして通りけり
すり減りし街端石段大夏木
取巻きの夜な夜なゐたる月下美人

田村米生
バラの名のラブを男はブラと読み
香水の方に目の行く美術展
鰻の日手持ちぶさたのトンカツ屋

永井一朗
お惚けは処世訓なり生身魂
里人の声をひそめりサングラス
かぶと虫負けて兜は脱がざりき

永島董玉
腹の虫まだ治まらぬ虫の闇
日の暮の輪になる前の踊の輪
近道をして道草の鳳仙花

西　をさむ
秋来ぬと風に驚く古今集
落蝉の天に向つて南無阿弥陀
裸子の握り締めたるおちんちん

久松久子
殿さまと呼ばれてケイレキ伴のなく
墓参り向ふ三軒両隣
説教を飛ばしてゐたる団扇かな

藤岡蒼樹
昔字付く村を駆く日焼の子
ばら帯に六等身の藍浴衣
出す目玉出す角義母や蝸牛

藤原セツ子
じじばばの魂運ぶ盆とんぼ
朝顔の蕾をほどき神の業
芋の葉をころころ鬼の泪かな

坊野留吉
叱られしことも美談よ盆供養
七夕や日支事変が放さない
若人よ戦はなすな原爆忌

松尾軍治
ジグザグに右肩下り震災忌
おくりびと生で清めるビヤホール
下車近く化粧完成夏祭り

松田吉憲
あやまちは皆酒のせい髪洗ふ
カンカン帽少しも患者らしくなし
妻に足投げ掛けられつ明易し

丸山紘一
孫子去り閑かな盆の戻りけり
梅雨明けの宣なきままに秋たちぬ
長雨に気勢上がらぬ土用鰻

三木蒼生
蛸と蚊と蝿と虫偏仲間なり
敵に塩与へ蛞蝓退治せり
足痛腰痛皆引き連れて秋

三塚不二
赤岳はホテルの名なり赤トンボ
悶絶のドラゴンレース秋日和
いたずらがすぎませんかいのこずち

三橋一笑
見えねども競泳らしきプール沸く
窓全開休日の夫秋刀魚焼く
犬参歩ほんとは飼い主癒してる

無患子
朝晴れて良き日とぞ来る鬼やんま
降りに降る卯の花腐し主婦腐し
トルファンの葱は無事かと天に問う

虫倉蝉音
もくもくと噴くや浅間の雲の峰
爺婆の忙しくなりぬ夏休み
採れすぎて三度三種の瓜を食ふ

むつみ
ネット裏玉筋を読む雨蛙
臍を出し背中を見せて極暑かな
河骨のなすすべもなき名前かな

村上美和
逃げ惑いながらも目高胸を張り
かぶりつくトマトに残る陽のぬくみ
首縦に振れぬ商談扇風機

百千草
成らぬ恋熱いシャワーに流そうか
落花火押し上げてゐる揚花火
行こか戻ろかかなかなに聞いてみる

森岡香代子
ドラゴンの炎に焼かれ猛暑の日
朝顔のつる指切り西日の窓

森　要
トコロテン素麺西瓜メタボ狸苦
短冊にたなぼた願う筆もあり
六尺に男気諦めて夏祭

柳澤京子
敬老会嫌いな訳は語意にあり
針穴のごとく血痕美味蛟つた
半月板こわれて立てぬ敬老会

山内重昭
頸伸ばしキリンが食べる鰯雲
草野球凡打連発獺祭忌
未完成クレーン高きに登りけり

山本あかね
リクルートスーツ連なり行く残暑
須磨寺の管長さんに踏き踊る
腹巻のだらりと乾く溽暑かな

山本けい子
椎の木に登りし夜水番の父
軒に出る旗が合図の川泳ぎ
送り梅雨投網のごとくしぶきけり

山本　賜
唱へるごと野にオミナエシオミナエシ
釘打つは子どもの音よ夏休
留守番と金魚の世話を安請合い

横山喜三郎
遺伝子を継がず一等運動会
見ぬふりの視線の先に水着ゆく
入れる刃を拒むのど根性

吉田恵子
Ｖの字に汗をしみらせとびの服
落とすまい線香花火の競ひあい
ふかし芋ナイフフォークで皮をむく

吉野香風
巨大なるしりのならびて潮干狩り
兵舎の屋根目へて静もる進軍歌
つばめ来て大安吉日かと思う

渡辺さだを
舌戦は百日紅燃えつきるまで

渡邊美代子
旅先の景清酌みて梅雨深む

いとはんの磨く爪光鳳仙花　　舟唄は里の恋唄椎の花
スカートをめくる風あり夏だいこ　　浮雲や卯浪さ浪の阿賀野川